

審査陳列報告

絵画部

金森 宰司



絵画部の審査は厳選に行われました。搬入者数 425 名、入選者は 284 名、内訳は、小品部門が 44 名、データ部門が 16 名、データ部門の中から 2 点入選が一名おりましたがこの部門の目的である若手の育成としての深まりを感じました。一般部門が 224 名で新しい傾向の作品も増えており充実した作品ばかり選ばれました。

受賞会議において新たに 3 名の方が会員推挙され新作家賞 5 名、絵画部賞 7 名が選ばれました。絵画部としては若手の育成を考え本年度より損保ジャパン美術財団賞が新設され一名が選ばれました。今後の新制作だけでなく美術界での活躍を期待しています。

展示スペースの大改革をいたしました。

以前ありましたフロアチーフを復活し、展示委員長、フロアチーフ 2 名、運営委員より 1 名の 4 名で展示

対策チームを設置しました。

国立新美術館にて展示を行うようになって以来のパーティションの配置を改めても良いのではないかと話し合わせ、「作品が美しく見える」をテーマに広いスペースを生み出す事を考え、2 枚一組のパーティションの組み合わせを基本にして組み直した結果、例年より 6 枚のパーティションを減らして、二階に 5 部屋、三階に 4 部屋全員全ての作品を距離をとってみる空間を生み出すことができました。その上入り口から出口までの通路を分かりやすくする事で、一般出品者の壁も広がる効果を生み出品作品全て一段掛けで収まる見やすいスペースができました。新たな新制作の印象を来訪者の方に感じていただけたのではないかと思います。

会員および出品者の方がたに 76 回展への協力を感謝し御礼申し上げます。

彫刻部

瀧 徹



彫刻部の会場には例年 160 点余りの作品がところ狭しと並びます。その内の半分である約 80 点は一般応募者の中から、会員の審査により選ばれた作品です。

私が若い頃は初日の会場に足を踏み入れ、展示された作品を見まわすと、心のときめきや緊張感が伝わってきました。会場をまわると新鮮な感覚があふれ充実した気持ちになった事を思い出します。

1 つ 1 つの作品から語りかけてくる気配があり、これが新制作の 1 番の魅力ではなかったのかという思いを強く感じます。

魅力といいますと、審査の後で新



Z ひ と と き



スペースデザイン部

白川隆一



制作彫刻部の魅力はどこにあるのが話題になりました。

たとえば企画が物足りない、社会に強く発信した関わりをもっと持つべきだ、他の会のように賞を多く作るべき等々いくつかの意見が出ました。

まず一番大切なのは出品者全員が、伝統ある新制作に関るといふ情熱を持ち続ける事だと思います。

若い人は惰性で作品を作る事なく、会員は気持が惰性にならないようにしたいものです。審査報告とは少しずれましたが、最近の新制作の印象を書きました。

スペースデザイン部の応募状況・審査結果は、応募点数合計 93 点（壁作品 22 点、宙吊作品 6 点、床作品 18 点、野外作品 1 点、ミニアチュール部門 46 点）、入選点数合計 49 点（壁作品 15 点、宙吊作品 4 点、床作品 13 点、野外作品 1 点、ミニアチュール部門 16 点）。初入選者 9 名、再入選者 36 名でした。

新作家賞は 4 名の方が受賞されましたが、新会員の推挙には至りませんでした。

ミニアチュール部門は今年で開始から 4 回目となり、応募者も増え一部門として定着した感があります。小作品だからできる表現の豊かさに驚かされたりしますが、その数はまだ少なく、これからに期待したいところです。

壁作品・宙吊作品の応募者は若干

の増加でした。意欲的な作品があるものの全体的にこぢんまりまとまった印象が残念でした。

床作品は応募者の減少傾向が止まらず危機感を抱いています。

陳列作業は出品者も積極的に参加いただきスムーズに進みました。感謝です。

その裏には陳列委員が事前に模型を基に打ち合わせをするなどし、しっかりした陳列計画があった事が大きいです。

今年で新美術館に移って 6 年目ですが、搬入・審査・陳列等の美術館での流れは当初に比べかなり改善され良くなったと思います。

審査を終えて、スペースデザイン部がデザイン部門としてこれから目指す方向を検討する必要があると感じた次第です。



『賞牌』
第 76 回新作家賞
受賞者に贈られました。



麦倉 忠彦「東雲」
ブロンズ
24 × 8.5 × 7cm

シンポジウム「芸術と社会」

2012年9月23日(日) 会場：国立新美術館 3階講堂



第76回展を迎え、現代美術の多様化とともに変化しつつある芸術と社会の有り様を背景に、表現の垣根を超えた共有のテーマとして、芸術の役割と活動について、新制作が社会の中で影響を与え続けた歩みとこれからのアーティストが切り開く未来についてシンポジウムが開催された。

パネラーは谷新氏(宇都宮美術館館長・美術評論)、中瀬康志氏(金沢美術工芸大学教授・美術家)、新制作からは、澄川喜一氏(彫刻部)、藤原郁三氏(スペースデザイン部)、司会は北郷悟(彫刻部)、佐伯和子(スペースデザイン部)で執り行われた。

参加者全員が丸く向かい合わせで座り、会員も一般参加者も同じ位置関係にした会場は、250ほどの椅子もほ

ぼ満席となり期待に満ちた雰囲気があった。

まず、谷氏からこれまでの日本が歩んだバブルなどの経済的時代背景と芸術による地域おこしなど公益性、公共性の姿が報告された。また、モニュメンタルな21世紀以後のシンボリズムが変化を遂げた事も例とされた。

中瀬氏は、彫刻の可能性としてそれぞれの価値観が横につながりだす状況が生まれ公益性といったパブリシティを例にアーティストインレジデンス等の現場との関わりから社会空間における表現の可能性について話された。

澄川氏からは、東京スカイツリー@のデザイン監修をされたことから日本のランドマークタワーとして見るものにとって重要なのは「不思議さ」や

「物語り性」であり日本の技術のモニュメントであり、芸術が社会に還元されることについて話された。

藤原郁三氏は、環境芸術について匿名性、無名性といった知恵を出し合うようなバックグラウンドアート(建築など構造など環境で)のコラボレーションの可能性を例とされた。

また、会場からは、公募展の発表の場や美術教育の社会性等貴重な意見を頂いた。

今日の変化しつつある社会と芸術について新制作の各作家の瑞々しい作品は、美術館に訪れる見る側の深い創造性も加わってこそ真の文化社会となるものであると感じた。

彫刻部 北郷 悟



76 回展企画・展示風景

● 絵画部《オープントーク》

展覧会開催の初日にオープントークが実施されました。なかなか一堂に会する機会の少ない全国の会員や出品者が会場に集い、いたる所で作品について活発に意見を交す姿が見られました。



● 《ギャラリートーク》

一方的な講評会ではなく、会員と出品者が相互に話をするギャラリートークが特徴です。会員も出品者も自分の作品の前で、まず自分の作品の制作意図や疑問点等を述べてから活発な質疑応答が行われました。

● 《チャリティー展》

今年も東日本大震災支援のためのチャリティー展を行いました。2年目ということですが昨年を大きく上回る募金をあしなが育英会に寄付する事が出来ました。ご購入頂いた方、出品者共に心から感謝申し上げます。

● 《グッズ販売》

昨年より絞り込んだ販売でしたが、会員のポストカード、カンバッチ等ほぼ完売の盛況ぶりでした。次年度以降の新たなグッズの登場をご期待下さい。

● 彫刻部《オープントーク》

今回2回目となるオープントークは、多くの方々の参加を得て、第1室からスタート。

最初に加藤昭男氏の解説から始まり、その後其々の作品の前で、熱心な意見交換が展開され、お互いに交流を深めることが出来ました。有意義な時間が生まれたと思います。



● 《チャリティー》

昨年の大震災を機に、彫刻部としては初めてのチャリティーを行ないました。今年も平面（ドローイング）と立体（彫刻小品）其々の分野で、多くの会員の参加を得て、来場者ご協力を頂きました。お陰さまで当初の目的を達することが出来ました。誠に有難うございました。



● スペースデザイン部《レクチャー》 「一光のたねあかしー」

国立新美術館3階研修室において、会員谷浩二氏によるレクチャーが行なわれました。

各種光源の特性や素材との関係について、また作品の視覚効果をもたらす仕組みの実験を交えながらの講義でした。

会場も参加者で満席になり、スペースデザイン部の光を使った作品に興味を持って頂けたのではないかと思います。

そのあと展覧会会場で、フリートークとして作品に対して自由に質問や感想を話し合っ頂く時間を設けました。一般公募者、来場者がスペースデザイン部の作品に、質問や感想を話し合う機会になればと考えております。



新制作生みの親・育ての親 < 8 >

絵画部会員 荒井茂雄

皆さんこんにちは、今年は夏をおもいきり楽しもうと思っていたのですが、楽しむどころか、ご存知の猛暑で夏に酷使されて、散々でしたが皆さんはお元気ですね。

さて、今回は創立会員の猪熊弦一郎氏の「第十一回新制作派」に記載されている“形の発見”と、彫刻部会員吉田芳夫氏の「第六回新制作派作品」に記載されている“友へ”の両者を紹介いたします。

前兩者の文にはそれぞれの“心”が裏付けされているテーマで共通しています。

形の発見 猪熊弦一郎 前文略

「日本の畫家はもつと形の美を追求し、認識しなければいけない。

形の持つ大きさ、強さ、異例、狂形、これ等は形を知る畫家にのみ與へられた、うれしい追求の世界である。形を創るには常識はむしろ敵である。

そして餘程の勇氣が要る。

時には腹立たしさもいる。意識的な無鐵砲もいる。皆冒険である。

其中にいつも秩序の仲裁者がなければいけない。

秩序、それは形の美を知り、感じ、統御し得るヴァランスを感じ得る、とぎすまされた智性である。

不思議な形、恐ろしい形、幸せな形、強い形、弱々しい形、安定する形、動く形、愉快な形、重い形、軽い形、種々あるが、これ等の持つ各々の美しさを感じ得る頭、それは選ばれた人々にのみ與えられる。

意味のない形の美を知る事は猶、むつかしい。形の美に敏感な畫家は畫を作る事を知つてゐる。形の美を知る畫家はたえず畫面を改造し、発見する。

これには非常なる勇氣と思ひ切りが必要だ。計畫通りの、軌道を進行する畫家には形の発見が少ない。

形を知る畫家は心をも作り得る畫家である」
と結んでいます。

(心で創った形は生きている。さまざまの形の心を知るものに、創る喜びが与えられることを熱い想いで語っています)

友へ 吉田芳夫 伊東兄

「度々御便りを頂いてをるのに無沙汰に打ち過ぎて居る故定めし君は憤慨して居るのではないか、で今日は近状を少し傳へて御詫びに代へ様と思ふ。

君が大學の用務を持つて上京したのは去年の十一月頃だつたから大分しばらく會はない事になる。その頃僕は新しい生活のために小彫刻に手をつけかけてをつたので珍しくそんなものを一、二、君に見せてさゝやかな生活設計について話したつげが、それも一應目鼻がつき秋の制作もやつと昨日で完了した所です。何時もながら出來上つたものへの不満は實に甚だしい、色々な理窟はつけてみても結局僕に云へるのは彫刻への愛情の不足です。君も知つての通り四五年前にあの問題を切り抜けて以來彫刻に對する愛情を周圍の誰彼よりも切實に身につけたと思ひ、自分の素朴な生を擧げて彫刻に注ぎ得たと思ひ上つた僕が今復切に感じるのは再び愛の問題です。あの頃の日記を開いてみると我ながらぞつとする位必死になつて生きると思ふ一番素朴な、一番ぎりぎりの線まで彫刻を作る氣持を持つて來やうとした努力で一杯でした。生きると思ふ三字と彫刻への愛情と思ふ六字を並べて書き兩方結んで愛と思ふ字を書いて、こごへて行く様な心を探つて見つけたが、多少のかたちの様なものがまとまつて來ると何時しかこの問題も乗り越えた様に思ひすごして弛んだ生活を始めてをつたのです。人間の良心をそ

のまゝに生きると云ふ事と水々とした彫刻への愛情を完全に一致させて生活すると云ふ事は考へ得べくして仲々なし得ないものです。この根本の問題を離れて周邊をどうどうめぐりをして居る最近の自分を思ひ、何時も馬鹿な程眞正面から自分の専門を見つめて居る君を思ふと激しい自責の念に打たれます。

北齋は死の眞際に俺は終いに猪の子一匹描き得なかつたのかと云つて歎いたさうだが此の執念こそ藝術に對する眞の愛情でなくて何であらうか、僕の様な者に彫刻らしい彫刻はとても出來まいと思ふがせめて崩れる事のない執念だけでも残したいと思ふ。石を割つて育つ雑草の様なしぶとい生命力、ひたむきな彫刻への愛情に徹しなければならぬと念じてゐる。友人甲斐にこの鈍根をしばらく長い目で見て呉れ給へ」と。

(石をも割つて育つ雑草のようなしぶとい生命力で、必死になって生き、彫刻に愛情を持ってぎりぎりの線まで作つていきたい、と自己を厳しく戒めて、鼓舞し、温かい友情に應えています)

では今回はこれにてお別れいたします。次回の広報で又お会いいたします。



新会員紹介

絵画部



小野仁良

私は福島県会津若松に生まれ、郷土の暖かい人情味の中で育ち、上京後、多摩美大の恩師達に友人らと学ぶ中で新制作協会を知りました。そして多くの素晴らしい先生方や先輩方と出会い、学び、また別れも経験し、今年やっと会の一員に加えて頂いた事に心から感謝しつつも、身の引き締まる想いです。と同時に今の自分は、多くの出会いや想いに活かされているのだと思います。この気持ちを忘れずに今後も制作に邁進していく所存です。

◆1970年福島県生まれ。1997年多摩美術大学大学院美術研究科油画修了。2002年第65回新制作展初入選。第72回、75回新制作展新作家賞受賞。



高橋正樹

この度は、会員に推挙いただき、有り難うございました。

初出品から30年、新制作が好きで出品を続ける内に、絵を描く時に大切なことを、様々な面から学ばせて頂くことができました。華麗で鮮烈な諸先輩の作品の中で自分の作品を観る度に、会員推挙など生涯叶わぬ夢とっておりました。

未だに実感が湧きませんが、これからが大切と今、自分に言い聞かせています。今後とも宜しく願いいたします。

◆1959年名古屋市生まれ。1983年愛知教育大学大学院美術科修了。1982年第46回新制作展初入選。第71回、第73回新制作展新作家賞受賞。



馬淵 哲

私の中には新制作は妥協をゆるさない洗練された表現者集団というイメージがあり、清々しい空気感をもって凛として屹立していました。今もなおそれは褪せることなく絶え間ない水の流れるように永続しています。純粋でのびやかな先達の薫陶を受け、新鮮な気持ちで制作に邁進する所存です。ご支援ご指導いただきました皆様に心より感謝申し上げます。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

◆1966年滋賀県生まれ。1988年京都教育大学教育学部特修美術科卒業。2001年第65回新制作展初入選。第68回、第70回、第75回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部



人見崇子

新会員に推挙していただき、誠にありがとうございます。新制作協会の会員、という大きな存在は、高校時代よりの憧れでした。振り返れば、出品の際の緊張感と、会員の方々と仲間との対話は、毎年の糧となり励みとなって蓄積されていきました。自由で新しい作品は心をときめかせ、次への一步を踏み出せました。厳しさと温かみのある新制作の中で、しっかりと自分の立ち位置を見極めて制作に臨みます。これからも、良い仕事をするために、全力でいきますので、どうぞ宜しくお願い致します。

◆1970年東京都生まれ。1994年第58回新制作展初入選。1995年日本大学大学院芸術学研究科修了。第74、75回新制作展新作家賞受賞。



岡孝博

この度は、会員に推挙して頂きありがとうございます。恩師が新制作に出品されていて作品も自分自身も進化していかなくてはという思いで、出品を重ねて参りました。

今回会員という立場にさせて頂き、更に変化していきたいと決意しました。今後とも、どうぞ宜しくお願い致します。

◆1970年広島県生まれ。1998年日本大学大学院芸術学研究科修了。2011年東京藝術大学大学院研究生修了。1996年第60回新制作展初入選。第64、75回新制作展新作家賞受賞。



遠藤丈太

三十代、入選落選を繰り返しながらその都度に会員の方々に温かいお言葉をいただきながら新制作に育てられてきました。人生の半分は過ぎたのだなと思った四十代、自分の彫刻表現とは、伝えたい想いは何かを考え、考えているだけではなく手と身体を使いながら追い求めていかなければという取り組み方へと向かいました。五十代に入り会員に推挙していただき感謝とともに、単に入落が無くなったこと以上に作品に対する責任は重くなったと感じています。これからも同じ姿勢で先輩方にはまだまだ浅いと言われそうですが、どこまで彫刻の深さを求められるか、こつこつと制作を続けていこうと思います。今後とも宜しくお願い申し上げます。

◆1961年東京都生まれ。1985年東京造形大学彫刻科卒業。1986年第50回新制作展初入選。第74、75回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞

■ 絵画部

板谷 論使 海野 厚敬 片山 裕之
金井 健一 山根 康代

■ 彫刻部

市川 壮途 江村 忠彦 佐伯 皖子
ゼロ・ヒガシダ 玉柴 広芳 松本 弘司

■ スペースデザイン部

井野若菜 神 芳子 新出こずえ子
半澤友美

損保ジャパン美術財団賞

豊澤 めぐみ

絵画部賞

柿原 康伸 近藤 オリガ
桜岡 みゆき 田中 直子
鶴川 勝一 寺田 佑子
平松 幸雄



訃報 (平成24年11月末現在)

新制作協会発展に尽力された故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

渡辺 隆根

彫刻部会員
平成24年8月7日逝去
(享年 73 才)



■ 受賞作家展

● 絵画部

2013.1月21日(月)～26日(土) 11:00～19:00

会場：銀座井上画廊 ☎03-3562-1911
中央区銀座3-5-6 (松屋前) 井上商会ビル3F

●オープニングセレモニー 1/21(月) 17:00-18:00

●オープニングパーティ 1/21(月) 18:00-20:00
※別会場『えん』銀座店 ☎03-3538-5496

● 彫刻部

2013.2月12日(火)～22日(金) 11:00～18:30

会場：ギャラリーせいほう
中央区銀座8-10-7 ☎03-3573-2468

●オープニングパーティ 2/12(火) 17:00-18:00

● スペースデザイン部

2013.2月11日(月)～16日(土) 10:00～19:00

会場：建築会館ギャラリー
港区芝5-26-20 ☎03-3562-1911

●オープニングパーティ 2/17(月) 17:00-18:30

《伝言板》

絵画部会員：丸山正三先生
白寿おめでとうございます。



新協友

絵画部】阿倍京子、右馬野恒子、海野厚敬、金井健一、
坂本由美、高柳かな子、竹内静江、立畠裕子、
林 勇次郎、右山夕起子、山根康代

彫刻部】江村忠彦、市川荘途

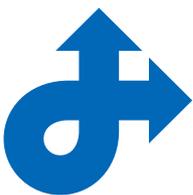
スペースデザイン部】

新出こずえ子、神 芳子、半澤友美

入場者数

第76回新制作展の入場者数は

全日程合計 54,311 人(無料・一般有料入場者合計)
でした。尚、昨年は 57,442 人でした。



新制作協会

〒110-0013

東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202

Tel.03-5603-8350 Fax.03-5603-8360

URL <http://www.shinseisaku.jp/>

E-mail webmaster@shinseisaku.jp

発行／新制作協会

企画・編集／広報委員会広報誌編集委員

辻井久子、岩間 弘、中野 威

監 修／細谷 泰茲

製作・印刷／株式会社横浜プリント

発行日／2012年12月吉日

広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批評、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡下さい。

■ 巡回展

京都展

10月16日(火)～10月28日(日)
京都市美術館

名古屋展

11月13日(火)～11月18日(日)
愛知県芸術文化センター 8Fギャラリー

広島展

11月27日(火)～12月2日(日)
広島県立美術館 県民ギャラリー

